

アリエージュの山に囲まれて

13Fg. 富士延章

このところアリエージュ県に足しげく通っている気がする。

去年の春から2年の契約で南西フランスの”首都”トゥールーズの大学付属の研究所に勤務している。初対面の人には上手ですねなんておべんちゃら言われるフランス語も、仕事をしたり、東京にいたときみたいに脳みそを介さずに延々と口からでまかせで出てくる屁理屈や馬鹿話ができるにはまだ程遠いレベルだ。下ねただけは、早くからうまく喋っていた気がするのだけれど。けれども、おかげさまで毎日本当に楽しく過ごさせてもらっている。

おかげさまってなんだよ、と言われるだろうが、本当におかげさまなのである。というのもこれは日本語の文章だから、こんな正直に書いても今のところ(!)被害がないはずなのだが—そしてたぶんまあ残念ながらバシバシとバシバシとも思うのだが—殆ど毎日仕事が終われば家に帰り、1, 2時間仮眠してご飯して、夜の8時か9時に市内か郊外のオケカ吹奏楽か室内楽かに顔をだす、というような生活をさせてもらっている。まあ、とにかくファゴットという楽器はもうその存在だけで天然記念物なみの扱いなんである。

伝統的にフランスは管楽器がとても盛んで、音楽院の入試のために、こぞって時の作曲家たちが書きためたソロ譜がある。これに悩まされたりおいしい思いをさせてもらった管楽器の人は極めて多いと思う。だいたいデュランとかからでて、えええ?と思う値札をヤマハで付けられてるから、貧乏学生は2, 3回は店に行って手にとってチラ見をしなきゃいけない。

もちろんファゴットもいっぱいその恩恵にあずかっているのだが、フランス人の書いた譜面には「ファゴットのための」とは間違っても書いてなくて、いつも「バソンのための」と書いてある。僕なんかよりこんな話よく知っている管楽器諸氏には申し訳ないのだけれど、少しだけファゴットとバソンの違いを記しておこうと思う。ファゴットの歴史はとても古くて15世紀くらいのイタリアのドゥルシアンという楽器に遡る。当時はチェロと同じ下のCまでしかでなかった(そんな楽器しか博物館で見たことがない)。それで、ほかの木管楽器と同様、ドレミファソラシドしか吹けないところから、やれ穴だのやれキーだの付け足して、古い旅館のような建て増しを行って半音階ができるようになり、音域も拡大していった。ここでベームというおじさんの登場なのだが、彼はこういう木管楽器の非論理的さ、面倒臭さに憤慨し、一念発起してリフォームを行った。フルート、クラはなんとなくうまくいった(んでしょ?)。ファゴットもおじさんさわった。そしたらどうだろう、あの感情豊かな、それでいてアグレッシブで、それでいて間抜けな、そんなキャラクターがどっかに行ってしまった。均一化はファゴットの敵なのだ。かくして非論理的な構造、指使いは現世に引き継がれることとなった。そんなファゴットファミリーのなかでもフランス式(バソンと呼ぶ)は、ひいひいおじいちゃんみたいな存在だ。建て増しのキー

もファゴットに比べて少なく、音量も小さい。キーンて高い音はだしやすいけど、”あのファゴットより”音程は良くない。こんな言われたい放題の楽器だけど、その味が変態的なファンを呼び、戦前ではラテン各国のオケの主流だったようである。”のため”でも描かれているように、世界中からこのバソンを駆逐したのは、あのカラヤン先生である。パリで「俺はバソンの音が嫌いだ」と一言。今、パリは半分がファゴットである。

トゥールーズの国立オケ「キャピトル管弦楽団」は未だにバソンしかとっていない。フレンチフレンチな楽団は、やれダフクロだ牧神だと、フレンチフレンチなプロを引っさげ、東京にもほぼ毎年遠征をしていると思う。まあこんなバソンの都に来たんだから、バソンの隣で吹けるかしら、なんて淡い期待を抱いてたものだが、アマの世界でバソン吹きは未だに一人しか知らない。まあファゴットにしても5人くらいしか知らない。

話が半分逸れたが、バソンでなくてもファゴットはやっぱり大変珍しがられる。そのおかげで「うちこない？」の声かけに、素直に「行く行くー」と言ったら、殆ど毎晩練習が本番になっちゃっているのである。

こんな僕に誰がした？という話だけれど、あまりに多くの人にお世話になって迷惑をかけたから、もうここに書ける感じではないのだけれど、やはり、僕の愛すべきお姉さんと「お兄さん」には登場してもらわねばなるまい。どうも、100じゃなくて”90周年誌”に、しかもまだ30もいってないこの若造（毛はもうない）が、あんな素敵で僕にとって大切な人の話を軽々しく書いていいのかなと、渋ったりもするのだが、まあ所詮僕の文章力であまりそこまで引っ張ってうまく書けなかったほうが何かと残念だから、とりはあえずで、本稿の主人公になってもらいたい。

僕が2001年に東大に入って、クラスの一級上にいたのがバイオリンの柊子さんだ。いつでも僕の優しいお姉さんで、未だに僕のくだらない与太話から、残念な（いつもお決まりのパターンの）”コイバナ”まで、時にはシビアに、時にはびっくりする角度から、でもいつも暖かく聞いてくれる。こんな時にしか、いつもの非礼を詫げる機会もなければ、いちいち口をだすこともできない感謝を表せないの。そう、柊子さんがフランス文学の研究をしたいしているというので、すぐに仲良くなって、いつの間にやら「ふじくん、ファゴットやらない？」って言われて、—そう、あれは今思えば、いたいけな高校出たての世間知らずな僕が色仕掛けに引っかかっただけ、とも言うのかもしれないが—「もちろん！」とファゴットの形すらろくに知らずにオケ部に入ったのだ。やっぱりこのお姉さんがいつも見方になってくれて応援してくれてくれたから、いつも気分よく楽器をさらってられたんだろうな。10年経ったいまでもいつもイタ電をかけて、まあどうしようもない不安とかを打ち明けられる人はそうそういるものではない。

あー。イタ電といえば、やっぱり管楽器のアイドル(?) やすしを無視するわけにもいかないだろうな。日本とフランスの時差も気にせず、全くくだらん下ねたを相当の頻度で電話している。たぶん最近日本語を口に出して喋る相手ナンバーワンだが、なにせ、この

おっさんのチャームポイントは、底なし沼のバカさ加減。いや、向こうもこっちを世界一の馬鹿だと思ってるかもしれないが、オレはそれは認めんぞ。

このイタ電も思えば10年つづいているのだなあ。まあ彼の名誉のためにひとつだけ管楽器の10年くらいの代に渡って知れ渡っている彼の武勇伝くらいを小話に載せておこうか。あれはやすしのおっさんが、福山に赴任したばかりの時。車を運転し始めてえらい優越感に浸っていたのだが、こちらは相も変わらず東京で飲んだくれた挙句にイタ電しただけなのです。「おっさん何やってんのー?」「お前のイタ電が今日はじめてありがたいおもたわ」彼は中央分離帯の緑の島みたいなやつにカミカゼ攻撃を仕掛け、あえなく車を全損させたばかりだった。「ありがたいおもたわ」で終わったら、素直にこちらも嬉しくなれるもの。大丈夫か、怪我ないか?聞きたくもなる。ところが、あのあほたん続けやがる。「いやな、ダルマにあたってん」と来た。「???」「え。ダルマしらの?」と来る。お巡り様に先ほど教えてもらったばかりの専門用語を知らない僕をネタに喜んでいらっしやる。つくづく残念でならない。まあこんな泰志は最近も相変わらず東京公演と松本公演の日を間違えて松本までおしかけたりするらしいから、誰にも真似ができない愛らしさがある。自分のことはこの際棚に上げるが、このおっさんに早く素敵なお嫁さんがつけばいいのになあと心底思う。

また話が脱線した。もう少しでダルマにあたる所だった。危ない危ない。

そう、ファゴットをそこいら中で吹いて、高いや低いや（最近低い!も言われる、ちょっとうれしい）言われながらも毎日を楽しく過ごしている、最大の恩人、"兄さん"、こんな呼び方失礼にも程があるので面と向かってなんかとてもじゃなく言えないが、心のなかではいつもなんとなく。菅原眸先生のことである。

眸先生は知る人ぞ知る日本のファゴット界の、いや、管楽器界の大スターである。ケセラ先生の異名を持つが、N響奏者という重役を長年努められたからだけではない、その管楽器セクションを誰にでも愛されるキャラクターでまとめ上げられてきたからだけではない、後進の指導、アマチュア奏者の指導、音楽を心から愛しているからこそ、丁寧さ（ケセラなのに!）。そういえば、東京時代に6年在籍していた都民響の合宿に眸先生をお呼びしたとき、ゲリラ室内楽マスタークラスなんていうのをやった。人をびっくりさせるのが大好きな先生ならではこの突然の夜コマは、弦楽器とかからも絶賛大好評だった。先生はひとこと「だっておれ音楽好きだもん!」だから、兄さんイケメンなんですよ!それから、よく菅原邸の飲み会になると、眸先生はこんなことを言う。

「とにかく（←ここが僕は好きだがまあいい）、皆さん子供を3人は作りなさい。2人は違うことしてもいい。でももう1人は音楽家に育てること。ね、そういうこと。分かった??」なんでかわからないけれど、こんな言葉を聞くたびに僕はメロメロである。かけーなといつも思うのだ。

月に一度くらいやっていた菅原邸の飲み会のことなんか、ここには書いても書き切れなんだけど、本当に早苗先生との二人の夫婦漫才を見るのが楽しくてみんな足しげく通って

いた。僕はD論の謝辞にこのパーティーの事を書いている。だって、これがなかったら書ききれなかったと思うから。

今僕は呼ばれてすぐにはいけないとこにいるけれど、とび、もじゃ、さゆりとかが菅原邸から楽しそうな声で電話をかけてきてくれるのがとても嬉しい。特に、この前の大震災の後、すき焼きをして元気を出してると聞いたときは本当に感動した。おい、富士元気か？という言葉だけでとても安心できた。

僕は都民響のシェヘラザードをやる前の日に菅原邸に連泊して、そこで出してもらったチゲ鍋が忘れられない。2日続けて飲んでただけだけど、例のソロをピアノの部屋で見ってもらって、いつもの菅原マジックにかかって、そして暖かいチゲ鍋のおかげで、自分でびっくりするほど迷いがなくなって気持ちよく吹けた。あの本番は自分の中で未だに特別な思い出だ。

でも、菅原飲みといえば、「inポルトガル」ってやつも忘れちゃいけない。2008年、英嗣と二人で企画したポルトガル演奏旅行ツアー「Orquestra de Câmara de Tóquio 2008」は木管重奏（チェロベース含む）と菅原夫妻の東大OB、都民響のメンバーという30人超の大所帯でリスボン、マフラ宮殿、エシュトリルで3晩連続公演をおこなった。ホール（または教会）の手配、楽器（チェロベースとコントラファゴット）の調達から、飛行機・バスの手配まで手作りで行った。中でも我々のために9重奏のシンフォニーを書いてくださったポルトガルの作曲家アゼヴェド先生には頭があがらない。難しかったから、ってのもあるけど。まあ、いろんなこぼれ話は次の機会に英嗣に書いてほしいなんて勝手に思ってる。あのクソハゲ（=ぼくです）はすっかりポルトガル人になって、仕事の遅いこと遅いことぶんぶん、とか、そんなんも含めて:Pでも、びっくりするほど楽しめたんじゃないかな？一応小さい頃からたまに夏休み親戚を訪ねて遊びに行ったあのポルトガルの景色に、あんなに大勢東京の木管の名手たちが参加してくれるなんて、僕にはやっぱり夢のように嬉しかった。菅原夫妻はちょっとしたラテンの洗礼を受けながらも、日本大使公邸にサプライズで招かれて、みんなで演奏したり。また近いうちににやんなきゃだめですよ、兄さん！

そんなこんなで、2人の兄さん姉さんだけでなく、数え切れない兄さん姉さん弟妹のおかげで、僕は今もなんとかファゴットを続けさせてもらっている。来年度はこっちの火曜日のオケでインペクやることになったし、頑張んなきゃ！

このところアリエージュ県に足しげく通っている気がする。

アリエージュ県というのは、トゥールーズから車をピレネー山脈に向かって1、2時間走らせたところ。険しい山、谷、鬱蒼とした森。先史のころから洞窟にはクロマニヨン人が住み、中世には異端派が逃げ込んで山中に要塞を作った。そんな山合いの場所だ。トゥールーズから近いこともあり、楽器仲間の交流は盛んである。この間は、国際ミュージックキャンプがあり、一週間ノルウェー人とスペイン人の弦楽器の若者に囲まれて、一日ホー

ル監禁、夜は教会、街中、ホールで本番という生活をした。最後の日は変態アリエージュ管楽器軍団がやってきて、外人ばかりなのをいいことに下ネタ全開で楽しかった。つい先週は、その変態軍団をひやかそうと思って、こっそり県主催の音楽祭に出かけたら金管バンドにファゴットをつっこもうという酔狂なアイディアで盛り上がり、僕は朝帰りをしてトゥールーズの家に楽器をとりにかえり、マゼールというその村を夕方5地から朝2時まで練り歩いた。僕は「東京からこの祭りのためだけにやってきたチンチュー（なぜなのか不明!）」というキャラクターに勝手にされて、地元で有名な歌のソロをもらい、アリエージュ県民は大いに盛り上がり、毎回毎回チンチューコールであふれ、僕は危うく自分の本名を忘れるところだった。youtubeという未来永劫存在するかははなはだ怪しいが、そんなチンチュービデオのアドレスを載せてこのどうしよもない与太話をお開きとしたい。

http://www.youtube.com/watch?feature=player_embedded&v=mSGAo6yhQ3M#at=157